

## 異常Hb症例におけるHbA1c測定法の違いが結果に及ぼす影響とその1例

◎加藤 太一<sup>1)</sup>、水嶋 文乃<sup>1)</sup>、青山 知永<sup>1)</sup>、佐藤 文明<sup>1)</sup>、尾崎 文彦<sup>1)</sup>  
株式会社 グッドライフデザイン<sup>1)</sup>

【はじめに】異常ヘモグロビン症とはヘモグロビンを構成するグロビン鎖の構造異常による遺伝性疾患である。日本人では約3000人に1人の割合で、諸外国では異常ヘモグロビン症が多い地域も存在する。多くの異常ヘモグロビン症においてHPLC法で測定したHbA1cは正しく測定できていない場合が多く、免疫法や酵素法で測定したHbA1cは血糖コントロール状態を比較的正しく反映した値であることが知られている。当施設でも以前よりHPLC法を用いたHbA1c測定で異常ヘモグロビンが原因の異常値を経験している。現在はHPLC法と併せて酵素法も導入しているため、異常ヘモグロビン症を背景としたHbA1cの測定法の違いによる値の変動について検討を行った。

【検討方法】HbA1c測定の依頼のあった検体のうち、外国籍の方の検体やHPLC法にて異常値を示した検体を抽出。HPLC法と酵素法の両法で測定を行い結果の乖離があったものについては高分離HPLC法分析を行い、異常ヘモグロビン症であるかどうかを調査した。

【結果】抽出後の54検体中1検体でHPLC法値と酵素法値で乖離が認められた。その後、高分離HPLC法にてヘモグロビンE症が強く疑われる結果となった。患者背景を以下に示す。33歳タイ人女性。健康診断にてHbA1c測定を行った。通院、既往歴は特になし。家族歴は不明。HPLC法HbA1c値=4.8%(NGSP)酵素法HbA1c値=5.6%(NGSP)

【考察・結語】異常ヘモグロビン症はHbA1c測定値に影響を与える。特に測定法に結果が依存する面があり、HPLC法で測定不能、異常低値などの際は異常ヘモグロビン症を疑い患者背景や投薬状況を確認する必要がある。近年のHbA1c測定件数の増加や外国人労働者などの増加に伴い異常ヘモグロビン症に遭遇する機会は増える傾向にあり、対応の幅が広がるという点でHPLC法と酵素法の異なる測定法を有するということは意義があるといえる。また、診療でHPLC法を用い健康診断などで酵素法を用いるなど目的によって測定法を使い分けることでより有意義なHbA1c測定が可能となると考える。

連絡先：0565-25-3165（内線番号：3173）